
大阪の魅力

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大阪の魅力

【Nコード】

N8947P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

転勤で大阪に来た猛久。最初はその汚さと騒がしさに辟易したがやがて。大阪は本当にいい街です。その大阪の魅力を書いてみました。

第一章

大阪の魅力

「しっかしなあ」

「何だよ」

「汚い街だよな」

まずはこう思っのだった。

「ここってな」

「そうか？汚いか？」

「滅茶苦茶汚いだろ」

道を見回せばだ。所々にゴミが落ちている。しかも鼠の死骸まで転がっている。

「ここ本当に日本か？」

「日本だぞ」

「大阪共和国とか言わないか？」

「国家元首は天皇陛下だぞ」

「いや、それでもここはな」

一方の男が顔を顰めさせている。黒髪を横に短く刈り引き締まった顔をしている。眉は細く短く目は小さく垂れている。口元も鼻立ちも実に引き締まっている。背はわりかし高く筋肉質の身体だ。

その彼がだ。隣にいる若い男に文句を言っていた。

「何か違うな。異常に暑いしな」

「長野生まれにはきついかな」

「きついな。それに」

「それに？」

「噂には聞いていたけれど虎ばかりだな」
今度言うのはこのことだった。

「阪神しかチームないのかよ、ここは」

「そっういえば御前横浜ファンだったな」

「ああ、そうだよ」

その通りだと同僚に返す。

「この秋山猛久は生涯ベ이스ターズファンだよ」

「何で横浜なんだ？」

「名字を見るよ。かつての大洋のエースのだぞ」

話すのはこのことだった。

「今の横浜のな」

「御前古いな、まだ若いのに」

「知ってるさ、生粋の横浜ファンだからな」

「長野人なのにか？」

「それでも野球は横浜なんだよ」

随分と強引な主張だった。

「それはな」

「何か意味がわからないな」

「じゃあ巨人を応援するっていうのか？」

猛久は顔を顰めさせて問い返した。

「巨人なのか？」

「ここで巨人を応援したら死ぬぞ」

関西、しかも大阪である。

「確実にな」

「そうだろ？俺の中でもそうなんだよ」

「それで横浜か」

「ああ。滅多に優勝しないからいいんだよ」

今度はこんなことを言う。

「三十九年ぶりでもな」

「その差もかなり凄いかな」

「だからいいんだよ。滅多に優勝しないからな」

「かなり自虐的だな。というかマゾか？」

「横浜ファンは修羅の道だぞ」

今度はこんな極論まで出すのだった。

「それこそ地獄の様に負け続けるんだよ」

「暗黒だな」

「それでも応援するんだよ。まあ阪神は嫌いじゃないがな」

「安心しろ、関西人は横浜には寛容だからな」

関西人というよりは阪神ファンの特徴である。阪神ファンという生き物は巨人以外のチームには極めて寛容なのである。その分巨人に対しては非常に不寛容である。

「許してもらえろ」

「そうか」

「まあとにかくだ」

「ああ」

「御前関西に来たのにあまり嬉しそうじゃないな」
またこの話になった。

「八条ネットワーク、いや八条グループの本拠地は関西なのにな」

「それでもな。関西はな」

「長野がいいか」

「ああ、やっぱり長野がいい」

こう話すのだった。

「折角一生長野だと思ったのにな」

「栄転なんだがな」

「本社勤務だからか」

「そうだぞ、本社だぞ」

この大阪にそれがあるというのである。

第二章

「普通喜ぶぞ」

「こんな暑い街なのか？」

猛久は今度はうんざりとした顔になった。

「おまけに凄い湿気じゃないか。人も多いし騒がしいしな」

「寒くて静かな大阪があるか」

相手の返答はこんなものだった。

「大阪はいつも暑くて騒がしいんだよ」

「冬でもか」

「冬でも雪は滅多に降らないぞ」

「長野じゃ道が凍るのが普通だぞ」

「大阪でそれは絶対にない」

断定そのものの言葉だった。

「それで食い物はな」

「蕎麦は？」

「あることはあるがメインはうどんだ」

こう来た。

「それとデザートはな」

「林檎だよな」

「あることはあるがデザートはアイスクャンデーか」

「北極のか」

「蓬莱に自由軒に金龍ラーメンにつばら屋にかに道楽。あの食い倒れ親父も生き残っているぞ」

語るその言葉は誇らしげである。そんな話をしながらある場所に向かっていた。その先には。

「そら、あれも見えるな」

「あれか」

二人の目の前にあるのは塔だった。それこそは。

「通天閣だよ。いいもんだろ」
「大阪か」
「それと大阪城、大阪のシンボルだよ」
「大阪城か」
「長野人は大阪城好きだろ」
「まあな」
「猛久はその言葉には素直に頷いた。」
「それはな」
「真田幸村だからな」
「戦国最高の武将だからな」
「ああ、それに異論はないぞ」
「相手もそれは認めた。納得した顔で頷いてみせる。」
「もうすぐで狸親父の首を取れたのにな」
「徳川家康か」
「あの名古屋弁の爺の首を取ればな」
「面白かっただろうな」
「ああ。広島人として悔しい限りじゃけえ」
「何気に方言が出ていた。」
「全くじゃ」
「つてあんた広島人だったのか」
「ああ、時々方言が出るんだ」
「その方言は今は消えていた。」
「気にしないでくれ」
「じゃあそつするけれどな」
「ああ。とにかくまずは串カツ食うぞ」
「通天閣を前にしての言葉だ。」
「いいな」
「串カツか。はじめて食うな」
「安くて美味い。キャベツは食い放題だ」
「その広島人は笑って話す。」

「ただしソースは二度漬け禁止だからな」

「それは駄目なのか」

「わかつたら食うぞ。いいな」

「ああ、わかつた」

「腹一杯食おうな」

こんな話をしながら猛久は大阪に入ったのだった。彼は最初この街が嫌だった。それは一ヶ月経つても変わらなかった。

夜だ。難波をその広島人の同僚と一緒に歩いている。繁華街の中だ。その居酒屋で飲みながら話すのだった。

「なあ」

「何だ？」

カウンターで飲んでいる。飲んでいるのは日本酒だった。彼はそれを飲みながら相手に話す。

「この酒な」

「大阪の酒だけれどどうした？」

「酒の味が濃くないか？」

こう言うのである。

「それにつまみの味もな。濃いな」

「御前長野じゃ何と一緒に飲んでるんだ？」

「決まってるだろ。そばだよ」

ここでもそばが話に出る。

第三章

「他のも飲むけれどメインはそれだよ」

「そばか」

「こんなドテ焼きとかお好み焼きで飲んだりしないぞ」

「それが大阪だよ」

「これもか」

「美味いだろ？」

「味が濃過ぎる」

こう言って相手に抗議する。

「こんなに濃いのがあるのか」

「ここにあるじゃないか」

「こんなの大阪だけじゃないのか？」

「大阪にしかない美味い食い物だよ」

完全に大阪人になっている言葉である。

「この酒だつてな」

「好きになれないな」

「まだ言うのか」

「この近くにあるあれだよ。あの吉本の」

「なんばグランド花月か」

「テンション高過ぎるだろ」

酒を飲みながら顔を顰めさせて話す。

「何だかんだで騒がしくてな」

「明るくなつていいだろ」

「そうか？」

「何だ、吉本は嫌か」

「ああ、嫌いだ」

実にはつきりとした返答だった。

「好きになれない」

「どうしてだ、それは」
「あんな騒がしいのの何処がいいんだ」
「御前漫才とか落語とか駄目なのか」
「関東のは観るぞ」
「それはだというのだ。」
「けれど吉本にしても松竹にしてもな」
「駄目なんだな」
「テンションが高過ぎるだろ」
「というか関東のあれが静か過ぎるんだよ」
「相手の意見はこうであつた。」
「あんなの全然よくないだろ」
「そうか？」
「長野はもつと静かだよな」
「完等の話をしてからの言葉だ。」
「そうだよな、やつぱり」
「ああ、そうだよ」
「それを猛久自身も認める。」
「静かで大人しいよ、長野はな」
「それで吉本はか」
「精々さんま位だ。あれも騒がしいと思う時があるからな」
「さんまはあれで大人しくなつたぞ」
「相手は言う。」
「もうちよつと若い時のああいう感じでな」
「いつもやられてたまるか。とにかくな」
「ああ、とにかくな」
「俺は吉本は好きになれない」
「あらためて言う彼だつた。」
「大阪のお笑いはな」
「やれやれ。上方文化は駄目か」
「駄目も何も受け付けないんだよ」

そうだというのである。

「どうにもな」

「そうか。まあそのうち慣れるさ」

「慣れるとは思わないがな」

「大阪はそうした場所なんだよ」

ところが彼は言う。

「慣れてそれでな」

「それで？」

「もう離れたなくなるんだよ」

そうなるというのである。

「それが大阪なんだよ」

「そうか？俺はそうは思えないけれどな」

「まあ飲め」

ここでまた話す猛久だった。

第四章

「それでな」

「大阪の酒か」

「ほら、飲め飲め」

彼の杯に酒を入れてであつた。そしてさらにだ。

ドテ焼きも勧める。そのうえで食べさせもする。しかし猛久は相変わらず大阪を好きになれなかった。そんな中でまた一ヶ月だった。

「やっと涼しくなつたよな」

「そうだよな」

社内でこんな話を聞いていた。

「じゃあこれからカラオケ行くか」

「そうだな。久し振りだな」

「それewithことん騒いでな」

「楽しくやろうか」

「涼しくなつたか？」

ところが猛久はその話を聞いて首を傾げるのだった。白く清潔なオフィスの中はクーラーが効いている。しかし彼にとってはだ。

「こんなに暑いのか」

「えっ、暑いかな？」

「クーラーも効いてるしな」

「涼しいよな」

「最近外もな」

「いや、暑い」

ところが彼はこう言つたのだ。

「まだ暑いぞ」

「気温は下がってるよな」

「ああ、そうだよな」

「もうかなりな」

「いや、気温は下がってもな」
猛久はさらに言う。

「それでもな」

「それでも？」

「どうしたんだよ」

「湿気が凄いし」

それがあつた。まずは湿気である。

「それに人も多いしその熱気で」

「人が多いのはいいじゃないか」

「なあ」

「人が多くないと何にもならないだろ」

「そうそう」

「とにかく暑いだろ」

彼はとにかく自分はまだそう感じていた。

「まだな」

「で、秋山はどうするんだ？」

「一緒に来るか？カラオケ」

「どうするんだ？」

「いや、俺はいい」

彼がここで断つたのはある意味当然の流れだった。

「俺はな」

「いいのかよ」

「またつれないな」

「とにかくいい。帰って休む」

「おい、夏バテには注意しろよ」

「もう秋だけだな」

それでもであつた。彼にとっては暑かつたのである。

それでこの日は家に帰ろうとした。しかしここで。

帰り道でだ。ふと小腹が空いた。それで立ち寄ったお好み焼き屋でだ。

まずは好み焼きを注文した。そこでだ。

「ああ、兄ちゃん」

「何だ？」

「ほい、サービス」

店の人間がこう言って注文したのより大きな好み焼きを持って来たのである。その大きさは座布団程のものがあつた。

「食べなよ」

「こんなの頼んでないぞ」

「いやいや、だからサービスやで」

店の兄ちゃんは明るく笑って言ってきた。

「うちの店今日は開店二十周年やさかいな」

「それでか」

「ああ、それでや」

また笑顔で彼に言ってきた。

「だからや。食べてくれや」

「いいのか」

「ええで。何ならもう一枚焼こか？」

「いや、これで充分だ」

彼は兄ちゃんの今の言葉には慌てて返した。

第五章

「そこまではな」

「まあ真田丸二十周年記念やで」

「ここで店の名前が出た。」

「ようさん食べてや」

「真田丸か」

「それがこの店の名前やけれどな」

「いい名前だな」

彼はその名前を聞いて思わず言った。

「その名前は」

「ええ名前やろ」

「ああ、本当にな」

話を聞いて微笑む。長野人の彼には実にいい名前であった。

「それじゃあこの一枚とな」

「あいよ」

「それとビール貰えるか」

「ビールやねんな」

「それをくれ」

こう店の兄ちゃんに話す。

「何か機嫌がよくなってきたよ」

「ええでええで、じゃあ楽しんでや」

「ああ、そうさせてもらう」

また言う猛久だった。そうしてである。

店でお好み焼きを食べてビールを飲んでいるとだ。店の客達が賑やかになった。さらに賑やかになったがここで、であった。

「おう、やったで！」

「兄貴復活や！」

「打った打った！」

「よおやった！」

「野球か」

「ああ、そや！」

近くにいた客の一人がすぐに彼の言葉に応えてきた。

「阪神勝ったで！」

「巨人に勝ったで！」

「兄貴のサヨナラホームランでや」

「そうか、巨人が負けたか」

客達がこう笑顔で話すのだった。猛久もそれを聞いていた。

「それはいいな」

「おっ、あんたもかいな」

「虎キチやな」

「そやったんやな」

「いや、俺は」

彼はその好み焼きを食べながら彼等に話す。

「ベイスターズなんだけれどな」

「何や、横浜か」

「星かいな」

彼等はそれを聞いてまずは拍子抜けしたように返してきた。

「そりやまた珍しいな」

「大阪でな」

「まあええけれどな」

しかしすぐにこう言うのであった。

「巨人やないしな」

「横浜はええわ」

「そやそや」

「試合の時はよろしゅうな」

「横浜はいいんだよな」

猛久も大阪のこの考えがわかってきていた。

「巨人でないとか」

「巨人はあかん」

「あんなとこ応援したらあかん」

「絶対にあかん」

誰もが巨人には駄目出しであつた。

「あそこ以外やったらええから」

「そや、今日横浜負けたけれどな」

「気を落とさんことや」

優しい声までかけてきてくれた。

「さあ、これでも飲んでや」

「明日があるからな」

「あんじょうな」

「ああ、悪いな」

ビールをもう一本受け取つてだ。猛久は礼を述べた。

「それじゃあな」

「ぐつといきや、ぐつと」

「横浜かて何時か日の目見るで」

「だからそれを待つんや」

「そうなつて欲しいな」

彼は苦笑いと共に話した。

第六章

「ちよつとな。今はな」

「阪神かて暗黒時代長かつたんや」

「もう凄かつたからな」

「ああ、昔はなあ」

「星野が来る前はな」

その時のことを思い出すとだった。彼等は苦笑いになってしまった。

「負けて負けて負けまくつてな」

「いつも最下位が指定席やつた」

「巨人にも勝てへんかつたしな」

「斉藤や桑田に抑えられて松井や高橋に打たれてな」

ここでも巨人の話が出るのがまさに大阪であつた。猛久は話を聞いてそう思ったのだった。その言葉を口には出さないがそれでもだ。

「けれどその阪神もや」

「今はこつした調子や」

「だから横浜もや」

「明日を見るんや」

「ああ、そうだよな」

猛久も笑つて彼等のその言葉を受けた。

「それじゃあ今はな」

「そのお好み焼き食つてや」

「ビールも飲んでや」

「楽しくやりや」

「そうさせてもらつな」

こつしてだった。彼はそのお好み焼きとビールを飲み食いしながらそのうえで店の兄ちゃんや客達と楽しくやつた。その店の名前と場所も覚えた。

「真田丸か」

その真田という名前が彼の心に残った。

「いい名前だよ、本当に」

こう言ってそのうえで覚えたのだった。そしてだ。

ここ以外にも行き着けの店ができた。難波だけでなく西成や鶴嘴、北に福島に新世界にとだ。実に多くなった。

それでだ。同僚にこう話すのだった。

「困ったな」

「何がだよ」

「いや、大阪の店は安くて美味いからな」

「いいことだろうが」

「つつい食べ過ぎてな」

それでだというのだ。

「コレステロールが怖いな」

「そっちな」

「太る体質じゃないんだ」

それはないというのだ。

「けれどな。コレステロールがな」

「そんなにやばいのか？」

「あと塩分な。とにかく毎日食いまくってるからな」

「食いだおれか」

「ああ。本当に食いだおれだよな」

こうその広島の彼に返す。

「店の兄ちゃんやお客さん達も皆いいしな」

「いいだろ。明るいだろ」

「そうだな。明るいな」

このことはすぐに認めることができた。

「それもかなりな」

「長野よりも明るいか」

「長野は暗くはないんだ」

それはないと言う。

「ただ。静かだろ」

「前も言ってたよな、それ」

「大阪のそれとは違ってな。ただ」

「ただ？」

「賑やかなのは楽しいな」

「猛久の目がここで綻んだ。」

「その中にいるのはな」

「ああ、いいだろ」

「いいものだよ。それに人情があるしな」

「おばちゃんはどうだ？」

彼はここで今度はこの存在を話に出してきた。

「おばちゃんは」

「おばちゃん？」

「だから大阪のおばちゃんだよ。どうだよ」

「俺は熟女の趣味はないぞ」

彼は冗談でこう返した。何気に冗談を口に出していた。

第七章

「言っておくけれどな」

「違う違う、大阪はな」

「大阪は？」

「中学生、いや小学生からおばちゃんなんだよ」

そうだというのである。

「それから死ぬまでな。ずっとおばちゃんなんだよ」

「子供の頃から死ぬまでか」

「そうなんだよ。だからな」

「ああ、だからか」

「おばちゃんはどうだよ」

「会社の中にも一杯いるけれどな」

「凄いパワーだろ」

彼は笑って今度はこう話したのだった。

「もうな」

「破壊力あるな。テンションも高いしな」

「それがおばちゃんなんだよ、大阪の」

「最初はびっくりしたぞ」

猛久はここでも笑っていた。自然な笑顔である。

「電車の中で大声で話して笑って阪神のグッズ持ってるんだからな」

「そんなの当たり前だろ」

「そうだな。大阪じゃな」

「それが大阪なんだよ」

広島の彼はこう言って断言する。

「広島じゃ縦縞が赤になるけれどな」

「広島も変わらないのか」

「けれど大阪はその上に行くぞ」

「野球がか？」

「いや、おばちゃんのだ」
「そちらであつた。」
「おばちゃんがなんだよ」
「そつちか」
「もうな。一度見たらびつくりするけれどな」
「何度も見てるとな」
「親しみが持てるだろ」
「これがわからないんだけれどな」
「わかるものじゃないからな」
「彼は猛久に話した。」
「前言ったよな」
「ああ、わかるんじゃないくてだな」
「感じるんだよ」
「それだというのだった。」
「わかつたな」
「ああ、女の子でもか」
「女の子もおばちゃんだよ」
「彼はまた猛久に話した。」
「それは忘れるなよ」
「おばちゃんか」
「口煩くてそれでいて妙に気がついて味には五月蠅くて」
「厄介だな」
「だがそれがいい」
「彼はこんなことも言った。」
「それがいいんだよ」
「急に何か戦国武将みたいな言い方になつたな」
「ああ、大河ドラマ観たからな」
「彼は笑つてこんな風にも話した。」
「だからな」
「それでか」

「まあとにかく大阪は感じるんだ、そして慣れる」
「慣れるか」

「そういくといいからな」

「大阪ってというのは特別な街なのか」

「いや、特別かというところじゃない」

決してそうではないとも話す。

「そうでもないんだ、これが」

「しかし理解するより慣れろってのはな」

「そのうち慣れるさ。一年経ったらな」

「ああ、一年経ったら」

「この街から離れるのが嫌になるからな」

「本当かね、それは」

猛久はわざと笑ってこんな言葉を出してみせた。

「嘘じゃないのか？」

「嘘でこんなこと言うか」

彼はまずはこう言って否定してみせた。

第八章

「それに俺が嘘を言ったこともないだろ」

「まあ正直者なのは確かだな」

彼は確かに冗談は言うが嘘は言わない。このことは猛久もよくわかっていた。だからこそ安心して付き合いを続けているのである。

「それはな」

「そういうことだよ。一年経ったらな」

「ああ、一年経ったらな」

「断言するさ。御前はこの街から離れたくないって言っている」
そうなっているというのである。

「しかもだよ」

「しかもか」

「結婚相手もな」

「見つかつてるっていうのか」

「これはひょっとしたらだけれどな」

このことについては断言はなかった。

「そろそろいい歳だしな」

「そうになったらいいな」

猛久は大阪のその酒を飲みながら笑ってみせた。その言葉を聞いてであるのは言うまでもない。

「それじゃあ。一年後か」

「ああ、一年後だ」

そんな話をしたのであった。そのうえで楽しく飲んでいた。
そしてそれから一年経った。その時にだった。

人事部長にだ。こう告げられた。

「故郷に戻るか？」

「長野にですか」

「ああ、長野に戻って係長はどうだ？」

出世の話もプラスされていた。

「主任から一足飛びにな」

「またそれは大きいですね」

「本社での勤務が評価されてな」

それでだというのである。

「それでだよ。どうだい？」

「そうですね。少し前ならよかったんですが」

ここで猛久はだ。少しだけ残念な笑みを浮かべた。そうしてそのうえでこんなことをその人事部長に対して言うのであった。

「けれど今は」

「嫌なのかい」

「実は。彼女もできまして」

爆弾発言もした。

「その。地元の」

「おお、それでか」

「大阪も好きになりましたし」

このことも話した。

「それで」

「ふむ、長野には戻りたくないか」

「駄目ですか、それは」

「いやいや、実は長野の方で今途中採用の社員を採用しようかっていう話もあったね」

「じゃあそっちに」

「うん、そうしよう」

部長は何でもないといった調子で述べた。

「考えてみれば本社は今人手不足だ。人を減らすこともないしね」
「それでは」

「うん、本社に残ってくれ」

話はそういうことになったのだった。

「それでいいね」

「わかりました。それでは」

こうしてであった。彼は本社に、そして大阪に残ることになった。そしてこのことをだ。あの広島の彼に話すのであった。

「で、残るって言ったのか」

「ああ、そうだ」

このことを話していた。話す場所はやはり酒場であった。そこで飲んで食いながらだ。そのうえでその話をしているのであった。

「そうすることにしたよ」

「一年前だったら戻ってたよな」

「多分な」

それは自分でも認めた。

「そうしていたな」

「そうか」

「けれど俺は残った」

このことをだ。たこ焼きを食べながら話す。

「殆ど考えないで決めた」

「考えなかったか」

「ああ、考えなかった」

実際にそうだったというのである。

第九章

「迷いもしなかったな」

「それはまた変わったな」

「そうだよな。ああ、それとな」

「それと？」

「結婚するんだよな」

「このことも話すのだった。」

「俺な。もう少ししたらな」

「おっ、そうだったか」

「ちよつとな。知り合っただよ」

「何処でだよ」

「仕事の時にだよ。学校でもネット接続するよな」

「ああ」

「それである大学に行ってその事務員の人とな」

少し、いやかなり恥ずかしそうに話す。顔は赤くこそなっではないがそれでもだ。普段とは表情がかなり違っていた。

「そういうことだよ」

「そうか、よかったな」

「それで地元の人だしな」

「それで余計にか」

「縁だよな、これは」

猛久の語るその言葉がしみじみとしたものになっていた。

「そうだよな」

「ああ、そうだな」

彼もそうだと話すのだった。

「そういうのはな」

「大阪に来たのも残るのもだよな」

そしてこんなことも話した。

「それも縁だよな」

「ああ、縁だよ」

彼もこう返して猛久の言葉を認めた。そのうえでだ。こんなことも話した。

「ただな」

「ただ？」

「残るって決めたのは御前だ」

「俺か」

「大阪、好きになったんだよな」

「ああ」

その問いにくりと頷いて答える。

「今じゃ大好きだ」

「言っただな、慣れたか」

「慣れた。それで慣れるとな」

「いいものだろ」

「離れられないものがあるな」

猛久は笑顔でこう話した。

「この濃い味もな」

「いいだろ」

「ああ、いい」

猛久が今食べているのはお好み焼きだった。その上にはソースにマヨネーズ、それに鰹節と青海苔、紅生姜がこれでもかとある。

それを食べながらだ。彼は話すのだった。

「癖になるな」

「だろ？しかし俺はな」

「何だ？」

「広島生まれだからな。実はこのお好み焼きがな」

「嫌いか」

「嫌いじゃなかったが抵抗はあった」

そうだったというのである。

「広島のお好み焼きじゃなかったからな」

「そうなのか」

「けれど今はこれもいい」

その大阪のお好み焼きがだというのだ。

「美味しいよな、本当に」

「そうだな。じゃあこれからもな」

「ああ、これからも」

「大阪を満喫するか」

猛久はここでも笑顔で話した。

「このままずっとな」

「たまには地元へ戻れよ」

「長野にもか」

「それは忘れるなよな」

「それはか」

「ああ、地元あつてだからな」

それは忘れるなど。彼は猛久に話す。

「それはいいな」

「わかった。じゃあ野球もな」

「ベースターズのままか」

「これは変えないさ。これから何回最下位になってもな」

「まあ頑張れ」

「そうさせてもらうさ」

そんな話をしながらたこ焼きとお好み焼きで楽しく飲む彼等だった。二人共完全に大阪に浸かっていた。店の音楽の六甲おろしも自然に耳に入っていた。

大阪の魅力

完

2
0
1
0
.
9
.
8

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8947p/>

大阪の魅力

2011年1月2日21時40分発行